Le Clos de la Bruyere

ル・クロ・ド・ラ・ブリュイエール

地区、村：Soings en Sologne ソローニュ

オーナー：Julien Courtois ジュリアン・クルトワ

HP：http://www.juliencourtois.com/

【ワイナリーと造り手について】

ジュリアンはクルトワ家の次男として生まれ、幼いころから家業のワイン造りを手伝ってきた。父のクロード・クルトワとともにソローニュに引っ越し、1995 年からレ・カイユー・デュ・パラディがワインを造り出し、その 3 年後の 1998 年、ジュリアンが 20 歳のときに《ル・クロ・ド・ラ・ブリュイエール》として独立した。ル・カイユー・デュ・パラディから 5km ほどのところに、自宅とセラーを建て、4.5ha の畑からワインを造る。

早くから独立し、独自の世界観のワインを造り出してきたジュリアンの話す様子は力みがなく、例えばワイン名からも彼の思慮深さ、大事にしているものがよく分かる。

Résonance：共振、共鳴（シュナン）

Autochtone：先住の、大地からの（ロモランタン）

Originel：起源（ムニュ・ピノ）

Sava.Sol：サヴァニャン・ド・ソローニュ（ムニュ・ピノ）

Esquiss'：下絵、草稿（ムニュ・ピノ）

100%：（ガメ）

Ancestral：先祖から受け継いできた（コー、ガスコン、自根のガメ）

Elements：元素（ガメ・ショードネ）

少し昔話をすると、2001 年 VT ジュリアンの畑は、遅霜と収穫前の局地的な雹にみまわれ、収穫の 8 割を失った。もともと収穫量を抑えた栽培をしていた上に、その貴重なブドウの大方が失われてしまったのだ。1 年間の苦労の結果がわずかな収穫となったのだから、ジュリアンの落胆ぶりは大変なものだった。当時はムニュ・ピノから、オリジネル、エスキス、フラン・ド・ピエ、アルバの 4 種類の畑違いのキュヴェ

を造っていたが、この年はあまりに収穫が少なく畑別に醸造できなかったため、全てをまぜて醸造せざるをえなかった。天から無常にたたきつける雹の打撃を受け、たった 2 樽に減じてしまったワインにも、ジュリアンはユーモアをまじえて「コレール・ド・ゼース（ゼウスの怒り）」と名づけた。醸造から 1 年以上経った 2003 年 2 月に樽からテイスィングしたときにすら濃厚なジュースといった感じで、購入を足踏みしてしまったが、その後 6 月にボトルから味わったときは、すばらしい凝縮感のある生きいきとした味わいで、すっかりワインとしてのまとまりがでてきていた。

　このようなワインと歩んできたからこその、現在のラシーヌだと常々感じずにはいられないが、2015 年頃からのジュリアンのワインには透明感のある果実味と内側から湧きあがるようなエネルギーを感じる。それには気温が上がり、収穫時期も乾燥する年ばかりになってきたために、ボトリティスが減ってきた、もしくは全くないために酸化的なニュアンスが減退してきたと言うこともあるだろう。荒々しさの残るままリリースされていたころを懐かしくも思いつつ、現在のジュリアンのワインには余計な装飾の無いピュアな味わいが、品種とその土地の味わいが素直に表現されている。2020 年にはコレール・ド・ゼウスを彷彿とさせるような、リバション（VT05～07 のブレンド）がリリースされ、荒々しかった要素がまとまったときにしか現れない美しさを湛えている。